

パドマの華^{はな}

■ 楽曲データ

歌詞：中西慶全 作詞

楽曲：石原喜久子 作曲

発表：—

初演：—

初出：—

管理番号：M0237

■ 創作の経緯

1960（昭和35）年頃、京都文教学園において、音楽劇『蜘蛛の糸』（原作・芥川龍之介）の劇中歌として創作。

■ 解説

◆ 作品について

「朝のひかりのなか、蓮が咲き、まるで白銀のように露や蜘蛛の糸が輝いています。絵のように美しいここは、どこなのでしょう？ そして「まことを告ぐる 鳥の声」とは？

答えの鍵は、この作品の成り立ちにあります。作曲者の石原喜久子さん（大阪音楽大学卒、奈良県在住）によれば、《パドマの華》は1960年頃に、音楽劇『蜘蛛の糸』（原作・芥川龍之介）の劇中歌としてつくられました。みなさんもご存じのように、この物語は、朝を迎えた「極楽の蓮池のふち」をお釈迦様がお歩きになっているところから始まります。ですから、《パドマの華》の舞台はお浄土ということになります。

『蜘蛛の糸』には、蓮池の底には地獄がある、と書かれています。でも池の面は、私たちにそれと気づかせないほどに、穏やかに凪いでいる……。『蜘蛛の糸』の物語にはいろいろな解釈がありますが、私たちがこの曲を歌うとき、すべてを包む池とまどかに咲く蓮に、阿弥陀さまのお徳を重ね合わせることもできるかもしれません。「やさしく開け」と蓮にかけられた願いは、私たちへも向けられているのではないのでしょうか。

なお、原作に登場する蓮は白色（フンダーリカ）ですが、ここでは紅色（パドマ）に置き換えられています。作詞の中西慶全さん（元・京都文教大学教授）はすでに亡くなられており、その意味は定かではありません。みなさんはどのようにお受けとめになるのでしょうか？

◆ 演奏のヒント

6/8拍子のゆるるような感覚を大切に。テンポやリズムがずれてしまうとき

は、メトロノームや伴奏に合わせて手拍子をしながら、歌ってみましょう。

旋律線は起伏に富んでいます。6小節目や18小節目など、音と音の間隔が広いところは、お腹の支えをしっかりとつけて、喉に力が入らないようにし、息をしっかりと流しましょう。

また、17・18小節は1番と2番で歌詞の切れ目が異なります。特に、1番は歌詞の意味にそって「にごり／え知らぬ」と歌いなおしましょう。

◆楽譜・音源について

楽譜集『仏さまを讃える大合唱 御堂演奏会2015』（本願寺出版社刊、練習用CD付）をご参照ください。

解説執筆：山口篤子（浄土真宗本願寺派総合研究所研究員）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第226号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.